





記憶に残る赤の一幕

1「神は赤髪が好き」のオープニングで、マリンとジェーン・ラセルが登場。当時を代表するセックス・シンボルの美濃は話題に。2「アリアドーナ」の撮影時、現場でドレスとこの年の赤に選ばれたという一瞬。3 初の透明感を行き届ける鮮やかなドレスは「ムーンラング」のムードにぴったり。



ヨーロッパ的解釈

★フレンドガールの赤を印象づけるアイコンといえば、ジーン・ヴェークマンの作品に登場するアン・カリーナ。★数多くのコレクションに赤を使い、大舞台でコージスな女性像を生み出してきたマリン・ローランド。★本国のブギーとしての誇りと、王室一家としての品格を併立するキヤサリンのスタイルはさすが。



「赤を永遠にする」  
「サ・レ・ド・レス」

女性をはじめは「赤のドレス」によって私たちの記憶に刻まれます。一人の女性に永遠の美を奉じる、魂を燃やした「サ・レ・ド・レス」のなかでもとりわけ美しく語り継がれてきたドレスがあります。まずは、マリン・ローランド「神は赤髪が好き」(1953年)と、美しいリップ、美しいハイヒールでともて賞讃した、スパンコールで

きらきら光る赤いドレス。丈もろの美しい襟が冴わにります。胸元は袷の深い赤で覆われていますが、目の前でずきずきと露出しているように見えます。ショウガールの晴らしい気持のドレスです。この衣装は2001年にオークションにおいて1000万ドルで落札されました。もはや人類のお宝です。

次にジュリア・ロバートが「リターン・トゥーム」(1999年)のヴィヴィアン役で着用したドレス。ルビーのネックレスとともに着用されたオフショルダーの赤いドレスは、ヒロインの静やかな美身を印象付けることに、無名だったジュリアを一回、スターの地位に押し上げました。いわば「ヒロイン脱身ドレス」。

そして歴史紀元の洋装巨匠のキャサリン・ウェイトが「ムーンラング」(2007年)で着用したル・キヤドマンが赤リップとともに

に着こなす赤いドレス。細身の身体にぴたりと沿うパッサムスタイルの赤いドレスはまさに「完璧と情熱のドレス」でした。「マトリクス」(1999年)の赤いドレスの次にこのイオオジョンソンも忘れ難い印象を残します。モノクロームの印象の中で彼女が登場するシーンにはほんの一瞬で、その瞬間だけオオの人間らしい視線と感情が動きます。「生命の力」を記憶としてドレスです。

フランスの赤いドレスはハリウッドとは少しニュアンスが異なるかもしれません。たとえばルビーの映画に登場するアン・カリーナが力を抜いて着る赤いドレスは、クールな無邪心を露骨と結びつけることができるフランス女性の強っぽい魅力を引き出します。「コケティッシュ」(1999年)のイタリアでは「アリアドーナ」が戦後から歴史紀元と、赤いドレスを創り続けています。ヴェトナム「サ・レ・ド・レス」として知られるこの赤

は、女性の魅力と最大限に引き出す色として選ばれた、いわば「女性」の「自伝」を引き出す赤です。イギリスではやはり2月、キヤサリン妃がマカフィーの披露をするにあたり2人共、イングランドのナショナルカラー、いわば国家の権威にも通ずる赤を「ローリー」で演出した。「赤」はあらゆる場面で